

アジア諸国における生徒の個性に応じた教育に関する研究 — 日本・インド・中国・タイを事例として —

1. 研究の目的と概要

近年、アジア諸国の教育改革では、国内の多様性を尊重する目的から、学習者の個性を重視しようという動きが見られる。こうした背景を踏まえ、学習者の「個性」がアジア諸国においてどのように捉えられ、それが教育にどのように反映されているのか、明らかにすることが本授業の第1の目的である。そして、第2の目的は、こうした教育が、最終的に、学習者の幸福感、達成感にどのような影響を与えているのかを解明することにある。さらに、本授業では、アジア諸国の教育政策・教育制度について議論することで、各メンバーの教育分析の手法を向上させることを目指す。



▶左から順に、小原、黄、李、馬場

2. 研究の方法

本研究では、日本、インド、中国、タイ、台湾の教育政策・教育制度を熟知し、フィールド研究の経験を持つ大学院生を中心に、それぞれの研究対象国における歴史的、社会的、文化的文脈に配慮しつつ、生徒個人の個性や特質に応じた教育について、調査・分析する。これらの国以外にも、アメリカ、イギリス、フランス、ロシアなどの国々を取り上げ、それぞれの国における個性教育の現状と課題について整理する。また、そうした個性教育が、学習者である生徒の幸福感、達成感にどのような影響を与えているのか検討する。

3. 活動の概要

オリエンテーション、「個性」、「個性教育」とは（第1回）、デューイの「個性教育論」（第2・3回）、日本における個性教育（第4・5回）、世界における個性教育（アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、インド、中国、タイ、台湾）（第6回～第11回）、まとめ（第12回）



▶授業風景

3. 活動の概要（つづき）

授業の前半では、「個性」および、「個性教育」の定義について整理した。ここでは、個性は、性格、知能、性能、特殊才能、興味・関心、趣味、作業、容姿などに現れるものであり、個性を正しく理解するためには、個人の行動、情意、態度、逸話、作品などを手がかりにすることが望ましいことを理解した。そして、個性教育とは、そうした個性を尊重し、可能な限り、個人の独自性や創造性の育成に努める教育のことを指すということを、メンバーの共通認識としてもった。

続いて、谷口忠顕（1992）による『デューイの個性教育論』成文堂を講読し、デューイ個性教育論の基本原理である《経験の統一性》、《成長の連続性》、《探求の原理》、《習慣の原理》について概念整理を行った。

授業の前半最後には、日本における個性尊重の教育の歴史の変遷を、政策面および実践面において概観した。また、「個性化」言説の類型および「個別化・個性化教育のためのモデル」について理解を深めた。これらの詳細については、報告書にまとめる予定である。

4. 今後の予定

授業の後半は、集中講義形式で実施する予定である。集中講義では、それぞれの研究対象国における個性教育の取り組みの概要（個性教育の定義、個性教育の歴史の変遷）、問題点、成果、生徒の幸福感、達成感への影響などを明らかにする。これらの成果を持ち寄り、アジア諸国とその他の国々との共通点・相違点を導き出し、アジア諸国において共有されている「個性」の概念、および個性教育の特徴とは何であるのか（あるいは、そもそもそういったものが存在しうるのかどうか）を検討する。

（文責：小原 優貴）